

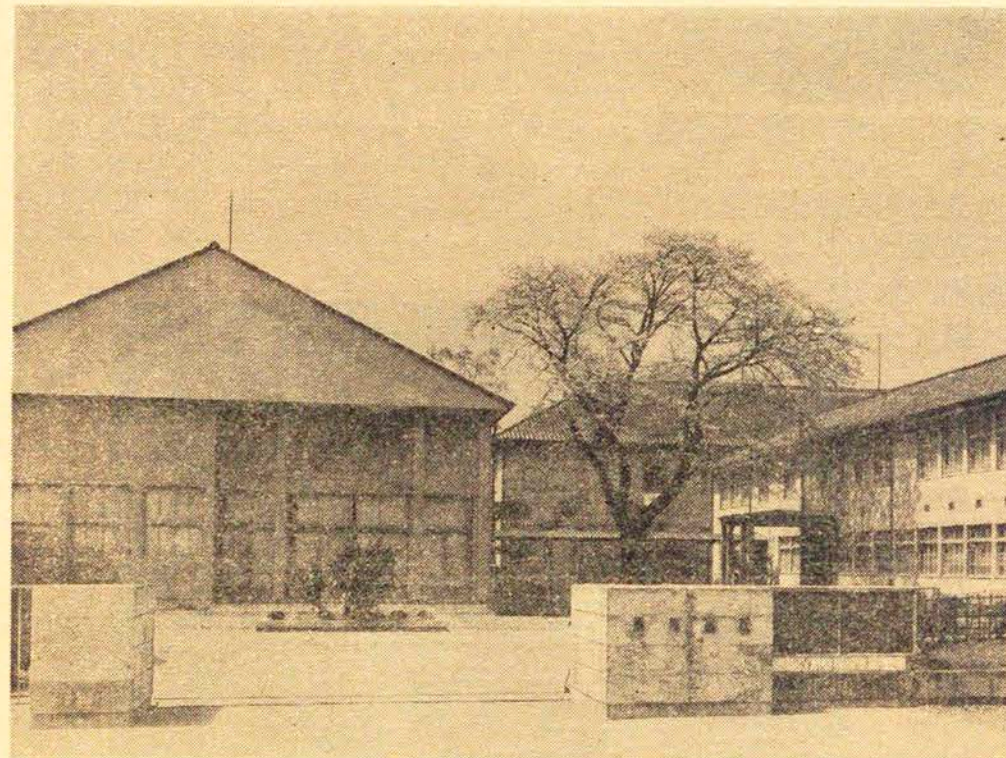
ひめまつ

創立60周年記念号

須賀学園生徒会

ひ め ま つ

— 60 周年記念号 —

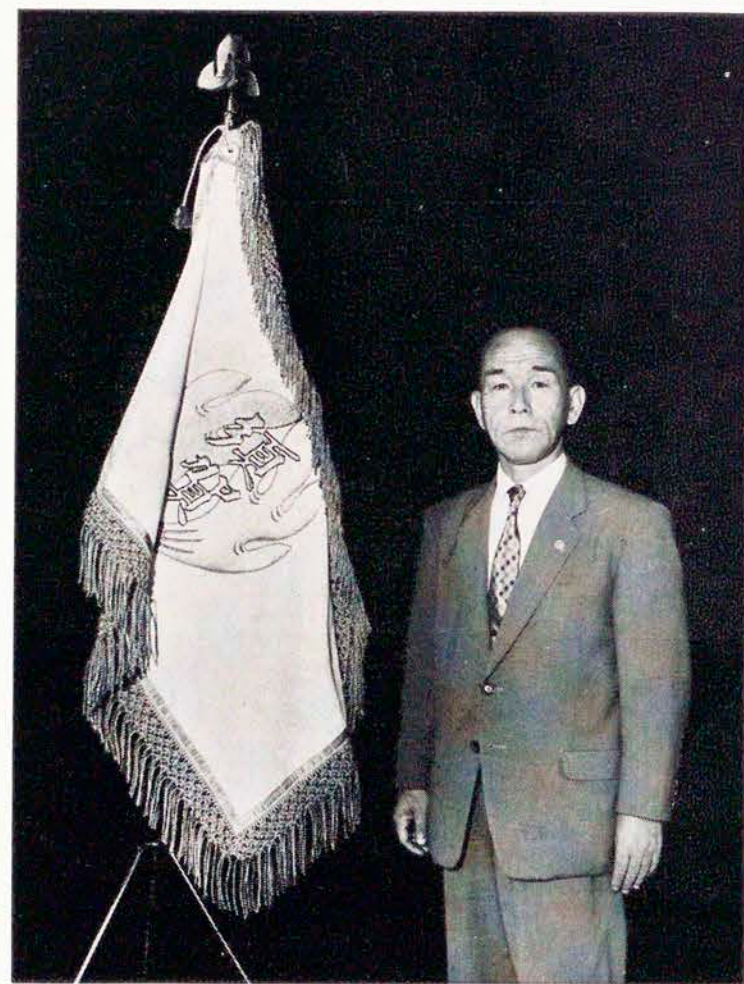


第 1 5 号

校歌
 二葉の萬葉を
 学びの道徳
 かたみこせし
 教の庭こそ
 あはれ尊と
 庭面に茂れる
 春の緑は
 かたみに祝ひて
 十ひの庭こそ
 あはれ尊と
 遙かに仰ぎ
 まさしくあは
 いそみあむ
 けと尊とあは
 れ尊と
 庭に茂れる
 千代万代と
 いそみあむ
 けと尊とあは
 れ尊と



創立者 須賀栄子先生



校旗 学校長 須賀友正先生

ひめまつ 第15号 目次

巻頭言	学校長 須賀友正	1
宇都宮須賀高等学校沿革史		2
六十年のあゆみ		3
須賀栄子先生の苦闘史	相沢幸吉	3
創立の昔を偲んで	渡辺キノエ	4
農村勤員の思い出	渡辺ユキエ	5
工場勤員	新井キク	5
思い出の母校	相沢トヨ	6
〔記念行事特集〕		
60周年記念音楽会を省りみて	村上トシ子	8
音楽会の思い出	床井京子	8
600人の大コーラス	伊藤睦子	9
心に深く	宇賀見和子	10
音楽会	高野ヒロ子	11
創立60周年記念運動会	藤沼庄平	12
運動会の思い出	設楽和子	13
〔特別寄稿〕		
働くアメリカの婦人	特別講師 加藤直衛	14
きもの	坂本文子	16
ティンエージャー	人見てる子	18
手芸について	大根田キン	19
良い社会人になるには	小野孝之	20
手軽るにできる農村向の保存食について	金子利子	21
短歌の実作(二)	井上悠逸	25
就職指導	村岡至	26
女子と数学	斎藤職	28
お人好	藤沼庄平	29
人間と有機化合物	永島恒男	30
英語の実用的価値と世界文化の摂取	中村弘	31
〔文集〕		
詩		32
短歌		41
俳句		44
作文		52
創作		52
私信二通	服部美登	59
一葉舟より夏草まで(藤村の研究その二)	文芸部	61
生徒会だより		68
昭和35年度行事一覧		79
職員住所録		80
編集後記		



須賀栄子先生銅像



旧校舎



昭和7年当時の職員及び生徒



第1回卒業生（中央創立者須賀栄子先生）



巻頭言

学校長 須賀友正

わが校創立六十周年の記念式典は、二月十一日本校講堂に於て盛大に挙行された。本校は、明治三十三年十一月三日、須賀栄子先生によって創立せられ、爾来六十年、その伝統を保持して今日に至った。創立当時のわが国情は、鹿鳴館時代の欧米偏重の反動として、日本固有の文化が見直される傾向となり、婦徳の涵養と女子教育の重要性が唱えられた時で、栄子先生は、日本婦道の高揚と女子教育の普及とを念願して、わが須賀学園を創立されたのである。

現今、科学教育の振興がさげばれている一方、精神面がやや軽んぜられているように思う。この時、本校は、伝統をほこる家庭科教育を中心にした異色ある女子高等学校として、女子教育界に更に進んで大いに貢献しようとしている。本校が、創立六十周年を迎えた意義も亦ここにある。その六十周年の記念として数々の行事を進めて来たが、ここに特筆しておきたいのは体育館の建設である。目下工事中であるが、凡そ五月下旬には、総坪数三百余の近代建築の体育殿堂が、グラウンドの一角に異彩を放つことであろう。

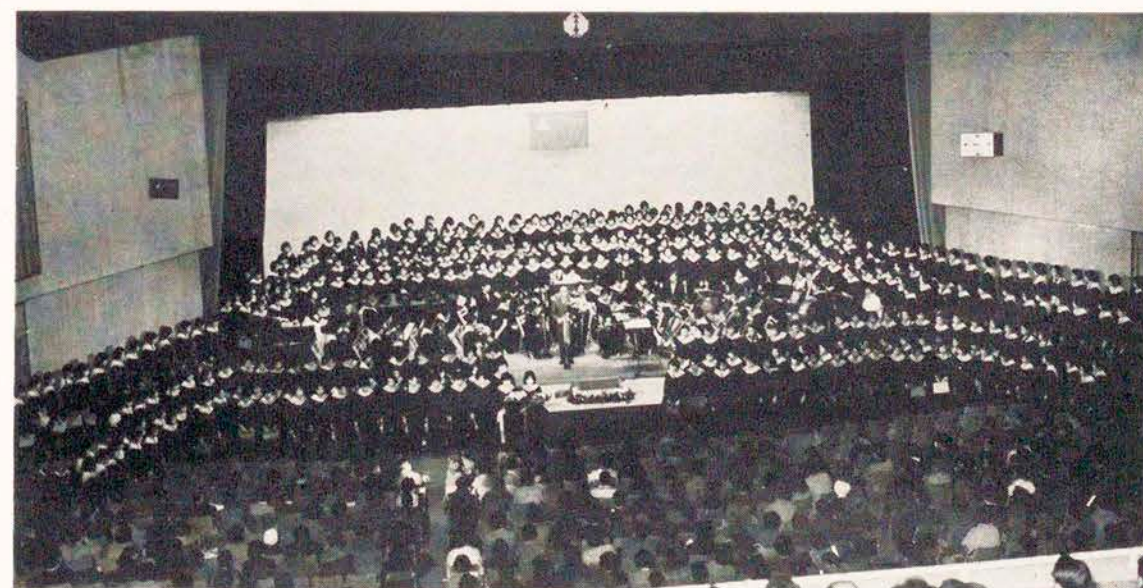
「ひめまつ」も、号を重ねて十五、六十周年記念号とする由で、何か一言をと求められたので、以上思う所を述べた次第である。



発足当時のソフト部



現在のソフト部



創立60周年記念大音楽会(榎木会館において)

六十年のあゆみ

宇都宮須賀高等学校沿革史

明治三十三年十一月	共和裁縫教習所創立	昭和二十四年十二月	須賀学園家庭専門部を併設
同 三十四年 七月	共和裁縫女学校と改称	同 二十六年 一月	学校法人須賀学園認可
大正十三年 四月	宇都宮須賀女学校に昇格		
昭和 七年 四月	宇都宮女子高等職業学校と改称		
昭和二十年 七月	戦 災 全 焼	歴代 学 校 長	
同 二十一年 四月	須賀高等女学校に組織変更	初 代 (創立者)	須 賀 栄 子
同 二十二年 四月	宇都宮須賀中学校を併設	第 二 代	篠 田 隆
同 二十三年 三月	財団法人須賀学園認可	第 三 代	須 賀 友 正
同 二十三年 四月	宇都宮須賀高等学校設置	第 四 代	相 馬 清 五 郎
		第 五 代 (現)	須 賀 友 正

須賀栄子先生の苦闘史

相 沢 幸 吉

私は、校長先生に長い間お世話になりました、相沢トヨ、相沢アイ子、相沢ユリ子の三人娘の父親です。須賀高も、創立六十周年を迎え、ますます御発展のこと、お喜び申し上げます。

実は、大正十四年八月発行の雑誌「関東」をふと読んでいるうちに、御校創立者須賀栄子先生の事が書かれてありましたのでなつかしく読みました。そして、栄子先生が、生涯を捧げた学校経営の苦闘史を皆さんに御披露することが出来ればと存じ、雑誌「関東」から写しとりました。

大銀杏が、おごそかな影を落す百間堀のほとり、桜の木立に包まれたいくつかの大建物、これこそわが宇都宮須賀女学校である。この堂々たる女学校が、今日の信用と声望とを獲得するまでは、さぶる面白い歴史があり、校長須賀栄子女史半生の奮闘は、正に血涙の連鎖である。

ここに須賀女史が苦闘の一編をつづって、読者と共にその秋霜烈日の意気を讃仰しよう。

二

須賀栄子女史——というよりも、宮の須賀さんと親しみ呼ばれているその人は、上州(群馬県)館林の藩士須賀正直氏の六女、父君は、維新当時、勤王の志士として世に聞えた人である。女史が三歳

の時、父君は他界し、母堂は、女史を生んで一カ月目になくなり、幼時早くも両親を失っていた。

女史の長姉が子さんが、栃木県立中学校の女子部教師に招かれた折、女史は、長姉につれられて来宮し、同校女子部を卒業、上京して女子に必要な教育を受けて再び宇都宮に帰り、西堀田町に、共和裁縫教習所を開設して、女子教育を始めたのが、実に明治三十三年(一九〇〇)で、女史二十七歳であった。

三

明るく三十四年七月、始めて共和裁縫女学校と改称し、爾来、入学者の増加により移転すること三度、明治四十三年(一九一〇)現在の地(河原町)に、県下知名の士百十四名の賛助を得て、ようやく校舎の新築を了し、その後、拡張に拡張を重ね、大正十二年(一九二三)には、校舎ほとんど完備して、中等学校に昇格した。明治三十四年以来、大正十二年までの卒業生は、実に、二千四百七名を算し、之に専攻科を加える時は、約二千六百名にのぼる盛況を見た。

四

共和裁縫習所時代の女史は、二十七、八の女盛にも、木綿着物以外には、きたことがなかった。三十三の時、健康を害し、旬日の転地療養に出かけるのに、始めて銘仙を着たのが、始めての絹物であった。

こうした苦しい生活と戦いながらも、女史は決して、預った子女の教育には、寸毫の弛みもなく、愛と厳との雄々しい態度で魂を打込んで、教養に従ったが、この熱烈な意気は漸く世に現われ、しかも、種々の毀誉褒貶をも意に介せず、一意専念、斯業のために尽す

いを続けたのであった。

五

家庭の人としての女史は、薄倖であった。幼にして両親を失い、辛くも長姉が子女史の手に、母とも父ともして育てられて人となつた。従つて女史は、すが子さんを、慈父慈母と思つて之に仕え、親に対する孝養をひたすらに姉君に献じて、その死去の日まで変る所がなかった。元来、女史の兄姉は、六人あつて、男一人、女五人、女史はその末子であつた。現在同校にあつて校務一切を処理している須賀正雄氏は、その実兄である。そして、女史の兄姉は、いづれも教育家で終始一貫している。即ち、実兄夫妻は、市内日野町に、下野裁縫専修所を開き、後、小袋町に移つて、相当数の生徒を集めていたが、女史が学校創立に際し、之を廃して、榮子女史の事業をたすけ、今日に至っている。兄姉相互扶助の美しさは讃嘆に値する所である。(文中現在とあるのは、大正十四年当時である)(PTA)

創立の昔を偲んで

渡辺 キノエ

私は、本校創立当時、「共和裁縫教習所」と言つていた頃の、第五回卒業生であります。その頃は、須賀榮子先生が校長をしておられ生徒数も五十名足らずで、私は、寄宿生(その頃十名位)でした。榮子先生は、当時、まだ二十八歳の若さで、元氣一杯、生徒の教育にあたつておられました。私は、一番年少であつたし、母がおりま

明治・大正・昭和に至る本校の歴史をよく知っているだけに、精一杯の努力をして来たつもりであります。なにとぞ今後ますます本校が隆盛をつずけてまいりますよう心からお祈りしております。(教諭)

農村動員の思出

渡辺 ユキエ

父や兄は日の丸の小旗に送られ、勝つて来るぞと勇しく征途につく。時は昭和十八年、ペンや針を鍛や鍛に替えて農村に出動、春の修学旅行等夢にもない。やがて麦の色づく初夏の暑さの中、雀宮小学校の校舎の一部に合宿しての麦刈り、今の生徒が旅行にでも行くような嬉しい気持ちで出かけたもの、僅か一週間の合宿作業にへたく。また一方には共同炊事の炊き出し班なども出現した。馴れない手つきで、陸稲の除草、雑草とおかほの見分けもつかず片端からむしり取り、農家の主人公に怒られたような珍風景も生れた。水田の除草、これは雑作業で、カチャ／＼カチャ／＼と稲の株間を濁して進むだけ、雑草など一本も抜けるどころではない。焼けつくような炎天下、想像以上の苦しい作業であつた。また秋には黄金波うつ稲田に、七、八人一組のグループで稲刈り、手の指まで刈るお嬢さんが多く、従軍看護婦ならずとも、赤チンキ纏帯持参の上、生徒の姿を追つて田圃巡りも並たいていではなかつた。指先の凍えるような霜柱の畑に麦の移植、すっかり感覚を失つた指先を、ハア！と思ふであつた、めての仕事、でも誰一人文句を言う者もなく黙々と働き続け、おやつにいたゞく白米の握り飯に唯一の喜びをもつた。

小春日和の丘、絵のような詩のような処、あの頃はそんなまや

せんでしたので、特によく面倒を見ていただいたのです。

そんなわけで、休暇中も、帰省せずに校長先生と二人で、学校に居たわけです。

卒業後、二年間、助手として学校に残り、程なく結婚生活に入つたため、学校を去りましたが、大正六年に、夫に先立たれて、再び母校に奉職することになりました。その時は、学校は、だいたい発展し、生徒数も五百名ほどになり、交通機関も、現在のように発達してはなかつたので、寄宿生は、百名位に多くなつていました。それで、現在、同窓会長をしておられる、寺内先生と二人で、寄宿舎の舎監を命ぜられ、実科を受持つていました。

昭和九年の十月に、榮子先生が急逝されて、一同悲歎にくれましたが、当時、宇都宮工業学校に奉職中の現校長先生が、その後を引きつがれました。ところが昭和二十年七月に戦災にあい、全校舎は灰じんに帰りましたので、止むなく、もとの市立実践女学校と、宇女高の校舎の一部を借りうけて授業をして参りましたが、翌年四月野砲第十四連隊であつた現在の所に引越して、とりあえず授業を始めました。その頃の学校は、何もかも不備で、設備も不足で、校長先生の御苦労も、並大抵ではなかつたと思います。それでも、校長先生必死の御努力と、PTAの御援助によつて、校舎も増築され、その外、講堂・家庭科室・体育館等、立派なものが次ぎつぎ新築されて、内容も、教師陣も一段と強化され、ようやく今日の発展を見るに至りましたことを思えば、まことに感慨無量です。

私も、本校に奉職してすでに四十五年になり、夢のように歳月が流れたように思います。何らなすこともなく、徒らに年を重ねたにすぎないことを反省して、残念に思つておりますが、自分としては

さしい丘ではなかつた。こゝで女子学徒にはまた大仕事の山林開墾が待つていた。男子先生を中心に木を切り倒し、その抜根、幾度か警戒警戒で雑木林の中に待避した。開墾された黒土へは、甘藷の植付、でも無肥料では、秋の収穫に掘り取られたのは、やせ芋、でも皆喜んで分けてもらい、最良の食物の補とした。あ、おやつがほしい。まんじゅうではいや等という今頃から考えれば、当時の生徒は本当に可哀そうであつた。(教諭)

工場動員

新井 キク

昭和十九年上級生は工場への動員が発令され、本校は中島飛行機製作所へ、ペンや針を、ハンマー・ドリルに持ち替えて、朝八時のサイレンを合図に、工場に働く。全員ラジオ体操、各棟の中隊長(主任技術者)以下一般工員、学徒、朝の空気を胸一杯吸つて取組む飛行機の部品、凍てつくような厳寒、相手はジュラの板や鉄部品としてハンマーもドリルもみんな冷たいものばかり、指の冷たさは例えようなし。広い、広い工場には男女の学徒が同じ職場で共に援けあつての作業であつたが、誰もがみんな真剣そのもので、軌道はずすようなふしだらなものは絶えてない。

ただ一途に私達の手で製産した赤トンボ飛行機が、敵を撃滅してくる日のある事を楽しみに、打つて一九とはあの時の気持ちだつた。工場内は機械の騒音で普通の話など聞きとれず、啞者のような手真似、学徒の工場出入は、正門通過の際のものしく隊伍を整えて歩調とれ！頭右！その出来ばえは、なんと学校の評判に関係す

るので、みな一生懸命力で歩調をとったわけだが、今、當時を偲ぶとおかしなものだ。

作業中警戒警報と同時に生徒待避、ドリルなどひっさけて、工場から二キロもある山の中の防空壕へ駆足、生徒の出たあと一応工場内を駆足で一巡、生徒の残っていないことを確認の上続いて待避する。その頃は頭上に敵機の編隊を目撃し、足はくたくた、咽喉はからから、気ばかりあせり足が前へ進まない。待避した山の壕は鹿の子斑の残雪の中で、吹く風は身を切られるように冷たかった。敵機に見つけられてはと、壕の中で縮って固唾をのんだ。

ある時はこんなことがあった。田川のほとりの壕へ待避した。折から暴進する汽車の響で崖が崩れ落ち、みんな土砂を浴び空襲かと驚いて蒼くなったりした。

戦争が次第に激しさを増し、一日中、工場と壕の間を往きつ戻りつで日没となり、空腹に加えての寒さ、携帯食糧も残り少ない。こんななまじな連日ではあったが、誰一人文句を言うものもなく、出来上った飛行機をなでて、はやく南の空へ、そして敵をやっつけてくれと、吾と吾身を励まし、欲しがりません勝つまでは」と精魂を打ち込んで励んだが、予算通りには行かぬもの、アメリカには一日の長があり、日本に利あらずの終止符がうたれた。

あの恐しかった工場動員中、無事故であったことがありがたい一事であった。(教諭)

思い出の母校

相沢 トヨ

すさまじい戦いの後、町中がなんとなく落ちつかない時代に、私

は須賀高等女学校に入学し、うす暗い兵舎での学校生活が始まりました。中に廊下をはさみ、南京虫を防ぐために目張りした小室がたぐざんあり、机も椅子も兵隊さんのお古。運動の設備も殆んどなく卓球は椅子になつていた手箱のふたで、それでもおもしろくできたものです。この不自由な中でも、戦争中と比べたら安心して教室で授業がうけられるということで、どんなに学校がよかったかわかりませんでした。

年中行事のバザーもだんだんと趣向をこらし充実し、中学部を卒業するころには校舎の中も学習の場らしくなり、クラブ活動にも熱が入って来ました。背の低い私は、少しでも大きくなろうとバレー部を志願し、小野先生達の御指導をいただきましたが、いつも後衛でとうとう大きくならずにまいりました。でも私学大会で足利月見ヶ丘高校で試合をしたり、演劇活動で葛生に行ったのもよい思い出でした。

私は今、小学校の教員として職務にはげんでおりますが、学生時代夏休み等を利用して幻燈機を携え、各学校や児童相談所、少年院、普恵院等をまわり慰問したことが、現在の視聴覚教育と結びつき本当に有意義な活動であったと思っております。

創立六十周年を迎えた須賀高等学校。なんとすばらしい発展でしょう。あのうすぎたい殺伐とした校舎は、なごやかな雰囲気につつまれた学び舎となり、教育施設・運動施設の充実。それによりはぐまれたソフト・バレー・音楽・その他の部の活動、私の家の前を朝な夕な通る下級生のはつらつさ。どうその恵まれた環境の中で校長先生始め先生方のお教えをうけ、一生懸命勉強されますようまた、母校の発展をお祈り致します。(卒業生)

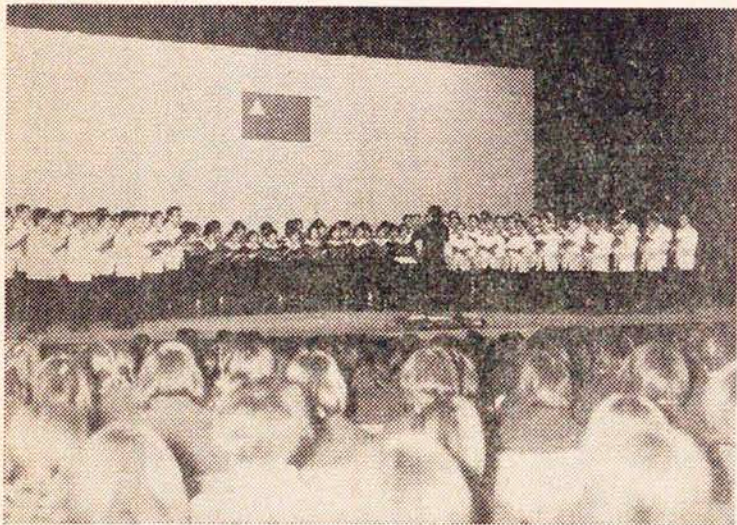
六十周年記念音楽会を顧みて

村上 トシ子

世は正にレジャーブームとやら？そんなこととはうらはらに、この半年間の忙がしかったこと。レジャーなどはあらばこそである。

六十周年記念音楽会の準備は、すでに、五月頃から始められたと言っても過言ではない。なぜなら、五月に入ってからまもなく、ハレルヤコーラスを授業に取り入れ、他のものと平行しながらまいいづぶろの歩みよろしく、のろのろではあるが始められたし、オーケストラ、コーラスも戴冠式に、音楽会プロの一つであったコンクール課題曲にと練習が始められ、曲目の選定がなされていたからである。

夏休みの合宿練習を経、各種のコンクールを経て音楽会に至ったわけではあるけれど、今ふりかえってみるとただ無我夢中にその日その日を送って来たようなわけで、余裕綽々と過して来たなどとはお世辞にも言えたものではない。夢中になれるということは最高なことだと思っけれど、一歩退いてそれをながめた時に、馬車馬のように、ただガムシヤラに突進するのみではなんと能がないことではなからうかと考える。余裕を持つことによって、すべての点が大きく進展し向上していくであろうし、常にそうありたいと願い、心がけている次第であるが、何と実行することのむずかしさ、現実には余裕のこれっぽちの持ちあわせとてない。元来人間である以上は余裕であるはずもなく、機械のように決して二度と同じ演奏はできないとされているし、音程などもくるうのはあたり前、と言っし



まえばそれまでであるが、あまりくるといえずたり、取れなかつたりすると、それは音楽以前の何物かであって、当然ヒステリーも起きてこようというものである。今度の音楽会で痛切に感じたことであるが、全般にわたってもっと、一貫性・計画性を持たすべきではなかつたかということである。期日も間近かに迫ると練習だけでも非常に広範囲にわたってしまつて何とかまとめねばと気はあせりながら、一向にはかどらず、その方まで手がまわらずに大変ご迷惑をおかけしたことが多々あつたようでしたが、大変申しわけなく思っています。しかし音楽会があのようになり終了したのも、先生方をはじめ皆さん方の協力の賜と感謝している次第です。